



ACCへの提案

インター・アングリカン一致・信仰・職制常任委員会

先日開催されたインター・アングリカン一致・信仰・職制常任委員会（Inter-Anglican Standing Commission on Unity, Faith and Order、IASCUFO）の年次会合の冒頭で私たちは、現在の5年間の始めにIASCUFOと会合を持った前セクレタリー・ジェネラルのジョサイア・イドウ-フェアロン大主教からいただいた激励の言葉を振り返った。彼は、委員会の任務は、「アングリカン・コミュニオンの使命を見極める」ための助けとするために、しっかりとした神学的調査を行うことであると述べた。今年の会議では、新セクレタリー・ジェネラルのアンソニー・ポッゴ主教は委員会に対し、Lambeth Conferenceから生まれた呼びかけを神学的に検討し、アングリカン・コミュニオンの意思決定構造に関する未解決の問題にそれらを結び付けるように促した。

遡って2006年、ローワン・ウィリアムズ大主教はアングリカン教会学の形を明確にするのに貢献された。彼が言うところ、アングリカン・キリスト教徒は、「厳しく中央集権的でもなく、本質的に独立した団体の緩い連合でもない教会、すなわち、聖書の朗読を聞くために集まる、コミュニティの密接な家族となることを目指す教会」、そしてできるなら、「イエス・キリストのゲストとしてパンを裂きワインを分かち合い、世界中で布教と聖務の一致を祝うことを目指す教会」になろうとしてきた。「これがアングリカン・キリスト教徒にとって「コミュニオン」という言葉が意味することであり、私たちのエキュメニカルな対話の多くでより明確に形づくられてきたビジョンである」

（「Challenge and Hope of Being an Anglican Today（今日アングリカンであることの課題と希望」、2006年7月27日、オンラインで閲覧可能）。

このエキュメニカルな考え方に沿って、私たちは、この短い報告で、私たちが引き受けようとする活動の一部を略述し、アングリカン・コミュニオンが前進するための方法を明確にする際の役に立ちたいと思う。過度な集中化と拘束されない自治の両方を操りつつ、私たちは共通の洗礼のコミュニオンの内に今の分裂を包容する方法を見つけ出すことができるだろうか。私たちは、その方法で、完全なコミュニオンに向かって私たちの主とともに歩こうとする共通の使命の内に、私たちの論争、そして私たちがともに生きる上での障害の枠を作り直すことができるだろうか。

論争への対応

アングリカン・コミュニオンはここ数十年の間にくつがの構造的課題に直面してきたが、一貫性を持った形で対処できてはいない。インター・アングリカンの「障害」は、最初に女性の按手式に関して現れ、アングリカン・コミュニオンは、Lambeth Conference とその後続く委員会において、「可能な限り最高度のコミュニオン」という言葉を作り出し、秩序と敬意を持ってこれに対応しようとした。管区教会の中には、差異化の構造を発展させることによって様々な見方を取り入れようと試みてきたものもあり、このことは教会学の実験と理解されてきた。

教会内での同性間の関係に関する意見の不一致とその状態はさらに長くつづくで見られており、未解決のままである。1998年 Lambeth Conference の1.10の教えは、多くのアングリカン・キリスト教徒にとって重要であるばかりでなく権威ある試金石としての役割をも果たすものであるが、一方で、それを改定することを望む人や、すっかりなくしてしまいたいという人もいる。教義面や神学面、釈義面での意見の不一致が続き、分断が拡大している中、2008年と2022年のLambeth Conference への出席を断わ

り、他のコミュニオンのインストルメンツに参加しない教会もいくつかある。一方で、同性結婚に配慮するために教えと実践を変えてきた管区もある。

アングリカン・コミュニオンは今、その場しのぎの決定と戦略を続けてきた結果、多くの即興的な差異化に直面している。このことを問題とはしない人もいるであろうが、ある程度の合意とコンセンサスを必要とするコミュニオンの呼びかけに答えることを難しくしている。例えば、よく知られているように 1930 年の Lambeth Conference の決議 49 で仮定されたような、アングリカン・キリスト教徒が共有する一つの信仰と職制を我々は今でも語ることができるだろうか。もしそれができないのであれば、私たちはどのくらい今でも一つのキリスト教徒コミュニオンであると言えるだろうか。

これらの問いに正確に対処するよう求められるグループとして、IASCUFO は、アングリカン・コミュニオンが自ら信じることを再び言い、教会の中でともに生きるために誠実に明白な表現を探るべきだと考える。さらに、アングリカン・キリスト教徒や管区としては、できるだけ高い程度で互いに意見が一致することを望むことができるだけであるため、IASCUFO は、アングリカン・コミュニオンが、一致できないことの教会学的表現として、構造的差異化 (structural differentiation) の手段を整理して考える必要があると考えている。「Good differentiation (良き差異化)」は、我々に求められているものの現時点では達成できていない一致に至るまでの道のりを、継続的かつ良心的に見極めることを可能にするかもしれない。

Good differentiation (良き差異化) とは

このプロジェクトは、このような差異化の必然性を仮定しようとするものではなく、長期的にそれを崇拝したり、私たちの辛い分断に味方するものでもない。そうではなくて、この仕事は、私たちの分断の現実と深さを認識し、それらを可能な限り神学的に責任のある方法で記述しようとするものである。これには、アングリカン・キリスト教徒だけ

でなく、すべてのキリスト教徒との間で私たちが召されている和解への懸命の努力に興味をもたらすであろう「十字架を通して一つの体」というキリストが形作った一致を基礎とする教会の教義が必要である。私たちのコミュニオンを完全なものしたり癒したりすることからまだほど遠い現状から、私たちの関心は、広くエキュメニカルなレンズを通してアングリカンの使命を見ることになるであろう。

教会間の分断や論争は新しいものではないが、「エキュメニカル運動」は、キリストの一つの体の永続的な一致に照らして、私たちの議論の再構築に向けての長い道のりであった。もっとも、私たちは使徒教会の初期の一致に共通の基盤を見つけることはしばしばあった。あるいはまた、個々の霊的・神学的な伝統に照らして、カトリック教会がフランシスコ会やドミニコ会、イエズス会の様々な教派を受け入れていることも同様である。このように見ると、私たちのすべての教派と構造は一時的なものに思える。私たち自身のアングリカンのコミュニオンのインストルメンツはその起源が最近であり、私たちの現在の課題に対して適応することが必要かもしれない。

これに類する提案は、善良な人々が違いを超えてお互いの空間を作るため努力をする中、近年各方面から現れている。例えば、アングリカン・チャーチ・グローバル・サウス・フェローシップが提案している盟約構造は、一つのキリストの体におけるコミュニオンの程度について慎重に考えてきた私達のエキュメニカル対話と同様、慎重に検討する価値がある。

私たちはまた、教会として控えめであるというアングリカンの伝統の中に、私たちの提案の先例を見い出すことができる。マイケル・ラムジー大主教は、アングリカン・チャーチの「不完全さ」を引き合いに出し、「それ自身の歴史を通じて、それが何らかのかけらを指し示すものである」と述べている。アングリカニズムは「不器用で乱雑であり、整然さと論理にまごついている」とラムゼイは書いている。「それは、自分自身を「最高のキリスト教」と称賛するのではなく、そのひどく壊れた状態により、すべての人が

死んでしまっている普遍的教会を指し示すよう与えられたものだからである (*Gospel and the Catholic Church* (ゴスペルとカトリック教会)、IASCUF0により引用、*Towards a Symphony of Instruments* (インストルメンツのシンフォニーに向かって) 5.5.4、オンラインで入手可能)。カンタベリーを中心としたアングリカン・チャーチのコミュニオンが、キリストのより広い体への一時的な捧げ物であるならば、私たちの不一致を可能な限り寛大に包摂し得る「good differentiation (良き差異化)」の新たな方法と手段を検討しない理由はない。

ACCは何をすることを求められているか。

我々はアングリカン諮問評議会に対し、次の決議を検討し、受け入れるよう求める。

アングリカン諮問評議会は

- IASCUF0からの「提案」を歓迎し、アングリカン・コムニオンにおける構造と意思決定の問題を、一つになるという私たちの呼びかけの中心として検討する。
- 可能な限りともに歩くことと、いかにして意見の不一致を忍耐強く敬意を持って調和させるかを私たちのエキュメニカルな対話から学ぶことの重要性を確言する。
- IASCUF0に対し、この作業を進め、その進捗をコムニオンのインストルメンツに報告するよう求める。